

(別紙様式10)

2020年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

【申請区分】: 萌芽的異分野連携共同研究 共同推進研究
産学官連携フュージビリティ・スタディ
共同研究集会 産学官連携課題設定集会

【研究課題名】: 北大西洋海域における捕獲・処理・消費・廃棄過程を通して見る自然／社会の関
係性をめぐる総合的研究

【研究期間】:2019 年度～2020 年度

【共同研究員】

共同研究員	氏名	所属・職名	専門分野	区分
研究代表者 (拠点内) (注2)	高橋美野梨	北海道大学・助教	政治学	
研究分担者 (拠点外) (注2)	赤嶺淳	一橋大学・教授	文化人類学	
	小澤実	立教大学・教授	歴史学	
	中丸禎子	東京理科大学・准教授	文学	
	林直孝	北海道大学・海外研究員	生態人類学	
	福永真弓	東京大学・准教授	環境社会学	
研究協力者 (注2) (注3)	須藤孝也	一橋大学・非常勤講師	デンマーク・キリス ト教学	
	中尾なづな	同志社大学・大学院生	地域研究	
	中園成生	平戸市生月町博物館・島の 館学芸員	民俗学	
	成川岳大	立教大学・兼任講師	歴史学	
	本多俊和	元放送大学・教授	文化人類学	
	ムスリン・イーリ ヤ	日本大学・研究員	宗教学	

(注2) 拠点内外については、募集要項別添の北極域研究共同推進拠点を形成する3研究施設の
研究者リストをご覧ください。

(注3) 計画申請書に含まれていなかった方でも結果的に本共同研究に参画された方(招へい者等)
が居られれば、研究協力者として記述して下さい。

【研究の内容】

(1) 概要を400字以内(文字のみ)で記載してください。

自然(nature)を人間との関係から切り離して対象化する科学知(Science)と、人間が自然と密接な
係わりを持ち、それに巻き込まれる存在であることを前提とする互酬的世界観に基づく在来知

(Indigenous Knowledge)とは、いかにして共存し協働することができるか。本研究の起点は、この問いに対して、北極グリーンランド・イヌイト社会の生物資源の捕獲・処理・消費・廃棄のフェーズから学際的に検討してみるところにあった。より具体的には、科学知／在来知にかかわらず、人間との係わりの中で説明されてきた自然の意味と射程、そしてそれをいかに人間との関係のなかで再定位していくか、という点に関心が向けられた。この過程で明らかになったのは、グリーンランド・イヌイト社会における自然観が、互酬的自然観と、功利主義的思想に基づくそれとの折衷で成り立っていることであり、その動性に関する研究が、管見の限り世界的にも皆無に等しい状況にあるということであった。

(2) 図表や写真も交えて、研究の内容や成果等を 2000 字程度でまとめてください。

本研究の実質的な活動は、科学知においても、在来知においても、人間との係わりの中で説明されてきた自然とはそもそも何か、その意味と射程について、グリーンランド・イヌイト社会を事例に検討を加えていくと同時に、それをいかに人間との関係のなかで再定位していくかということにあった。

こうしたある種の足元を見定めることが、科学知や在来知といった特定の知識を規定する因果律に引きずられず、両者の交流の諸相を同定していくことにつながると考えたからである。



自然の辞書的な定義で

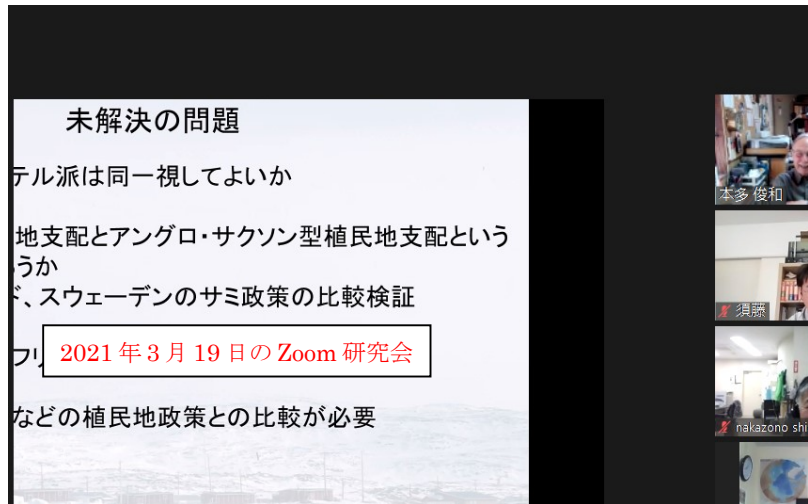
は、「人間の技術、生産、設計の影響を受けない、もしくはそれ以前の全てのものから構成される。自然界。自然環境 (natural environment)、処女地 (virgin ground)、改変されていない種 (unmodified species)、自然の法則 (laws of nature)¹」などが一般的だろう。この説明文から端的に示されるのは、文字通り、自然とは人の手が加わっていない状態を指しているということであった。具体例として挙げられている「処女地」や「未改変の種」は、自然に対して「原初性」を与えることによってはじめて定位される用語であるからである。これに対して、北極の先住民族社会においては、pinngortitat が「自然」を示す用語として多用されてきた。pinngortitat は、広い意味での「自然」を指すことから、日常的に使用される用語のみならず、行政用語や機関名などにも用いられてきた。これに対して、大地 (earth) を意味する nuna も、pinngortitat と同一線上にある用語として理解されてきた。pinngortitat と異なるのは、nuna が人間と自然の紐帯としての機能を持ち、エスニシティやアイデンティティといった人間の主体性 (Subjectivity) と密接に係わる用語として存立する傾向にあったことである。Redclift, M. and Grasso, M.によれば、pinngortitat/nuna いずれの用語もその意味するところは、処女地や未改変の種といった、人間が介入しない原初性を持つ (静的な) 対象ではなく、becoming あるいは to come into existence という動的なプロセスによって生成される存在であった²。そこでは、人間との共

¹ <https://glosbe.com/en/iu/nature>

² Redclift, M. and Grasso, M. (ed.) (2013). *Handbook on Climate Change and Human Security*.

存空間をとともに成り立たせる主体的な意味を持つものとして自然が説明されている。この限りでは、人間とともに生成される場(a place of becoming)として pinngortitaa を捉えていこうとする Ann Lennert and Jøren Berge の指摘も相似的であった³。

北極先住民族社会の一つであるデンマーク領グリーンランドのイヌイト社会は、カナダ・イヌイト社会やアラスカ・イヌイト社会と同様に、人間と自然とが互酬的に係わり合っていく在来知的思想に規定された場として、これまでも研究の対象になってきた。しかし、グリーンランド・イヌイト社会における自然の諸相を理解するためには、もう一つ重要な要素を加味する必要があった。それは、Kalland, A. et al.が指摘した自然に対する功利主義的なアプローチ (utilitarian approach to nature) である⁴。功利主義とは、結果として得られる



る利益の程度によって、そこに至るまでの過程のあるべき姿が決定されることを意味する。Kalland, A. et al.によれば、グリーンランド・イヌイト社会では人間と自然との互酬的な関係と、自然に対する功利主義的アプローチとがプラスサムの関係にあり、それは極北カナダやアラスカ・イヌイト社会にはない特質であるという。こうしたグリーンランド・イヌイト社会における互酬的および功利主義的自然観のハイブリッドな生成と展開は、現代イヌイト社会の自然観、延いてはそこに大なり小なり関連付けられる科学や在来の知識、さらには経験などの非一法則の側面を理解する一助になるかもしれない。

本研究では、互酬的且つ功利的な自然への処し方が、先行研究において断片的に指摘されながらも、十分に検討されることがなかった次の三つの要素およびそれらの間の相関の結果なのではないか、という仮説を導出するところまで議論を進めた。以下にその内容を概観するが、実証度を高めていく研究は、次のプロジェクトの主たるテーマになる。

・キリスト教的思想との習合および教派の違いによる影響

グリーンランドは、1721年にデンマーク＝ノルウェー同君連合の植民地になった。そこでもたらされたキリスト教への「改宗」が、グリーンランド・イヌイト社会に功利主義的思想を根付かせた可能性を検討する。そもそも人間と自然との間に序列をつけたのはキリスト教であり⁵、その教条には「自然や動物は人間に仕える以外にその存在理由はない⁶」ことが示されているからである。

Cheltenham: Edward Elgar Publishing. p.292.

³ Ann Eileen Lennert and Jøren Berge (2018). “Pinngortitaa – A Place of Becoming”. *Journal of Ecological Anthropology*. Volume 20, Issue 1.

⁴ Kalland, Arne and Frank Sejersens (eds.) (2005). *Marine Mammals and Northern Cultures*. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute Press. p.267.

⁵ 三浦慎悟『動物と人間：関係史の生物学』東京大学出版会、2018年、p.236。

⁶ 三浦慎悟『動物と人間』p.239。

・世俗/近代

在来知的思考と功利主義の接合を考える上で、世俗化/世俗主義の問題は避けて通れない。世俗主義を「近代主義の最後の牙城⁷」であるとする保莉実の議論を持ち出すまでもなく、世俗化/世俗主義なるものが、世界の近代化、すなわち世界を「脱魔術化」していくことと強い相似性を持ち、儀礼や祭儀、民俗信仰といった在来知的実践の相対化に影響を与えてきたと理解されてきたからである。

・イヌイト社会への視線

上記二つの項目とは異なるレイヤーに位置付けられるものの、本研究の議論がイヌイト社会を舞台に展開されるに際して避けて通れない要素がある。イヌイト社会に広く知られている確立した社会的地位としての「長老」、すなわち人徳と人望があり、豊富な経験と知識に基づいて、過去と現在をつなげ、しきたりや儀礼などの故実を伝える指導的な存在である。ここでは、この長老という地位が、カナダ・イヌイト社会などに比してグリーンランド・イヌイト社会において曖昧になっていることに着目する。要点は、言うまでもなく、在来知的な自然観に対する功利主義的思想の影響である。

(3) 本共同研究に関する活動・実績等を下表に記入してください。

①研究打合せ、学会参加・集会(注4)、調査等

(注4) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者によるもの

日程(月日)	日数 (日)	活動内容	場所	研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者の参加者名・部署	参加者数 (人)
2020.8.10	1	研究会	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中丸禎子、林直孝、福永真弓、中尾なづな	6
2020.8.31	1	研究会	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中丸禎子、林直孝、福永真弓、中尾なづな	6
2020.12.29	1	出版打ち合わせ (顔合わせ)	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中丸禎子、林直孝、須藤孝也、中園成生、成川岳大、本多俊和、ムスリン・イーリャ	9
2021.2.14	1	出版に向けた研究会	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中丸禎子、林直孝、須藤孝也、中園成生、成川岳大、本多俊和、ムスリン・イーリャ	9
2021.3.19	1	出版に向けた研究会	Zoom	(予定)高橋美野梨、小澤実、中丸禎子、林直孝、須藤孝也、中園成生、成川岳大、本多俊和	8
2021.3.26	1	出版に向けた研究会	Zoom	(予定)高橋美野梨、小澤実、中丸禎子、林直孝、須藤孝也、中園成生、成	-

⁷ 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房、2005[2004]年、p.28。

				川岳大、本多俊和、ムスリン・イーリヤ	
2021.3.28	1	出版に向けた研究会	Zoom	(予定)高橋美野梨、小澤実、中丸禎子、林直孝、須藤孝也、中園成生、成川岳大、本多俊和、ムスリン・イーリヤ	-

②研究論文

研究代表者並びに、研究分担者あるいは研究協力者が著者の関連論文がありましたら可能な限り記載ください。

論文が複数ある場合は、そのフォーマットとして論文1の分をコピーして記載してください。

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	Takahashi, M. (2021): The Politics of Whaling and the European Union, <i>Senri Ethnological Studies</i> , 104, pp.225-245.	
(1)著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	Tabata, S., Otsuka, N., Goto, M. and Takahashi, M. (2020): Economy, society and governance in the Arctic: Overview of ArCS research project in the field of humanities and social sciences (2015-2020), <i>Polar Science</i> , available online 13 October 2020, https://doi.org/10.1016/j.polar.2020.100600	

③研究書等著書

著書名・著者名	出版年月	出版社名
【著書名】捕鯨と反捕鯨のあいだに:世界の現場と政治・倫理的問題 【著者名】岸上伸啓編著、高橋美野梨ほか計17名	2020年11月	臨川書店
【著書名】自前の思想:時代と社会に応答するフィールドワーク 【著者名】清水展・飯嶋秀治編、赤嶺淳ほか計9名	2020年10月	京都大学学術出版会

④特許等出願

特許、実用新案、商標	
なし	

⑤研究発表(資料添付も可)

発表年月日	発表者名(共著者を含む)	発表タイトル	発表学会等名称	発表地	招待講演(○)
2020.9.5	高橋美野梨	互酬性と功利主	日本島嶼学会	Zoom	

		義：北極グリーンランド・イヌイト社会における自然観について	2020 年次大会		
--	--	-------------------------------	-----------	--	--

⑥国際シンポジウム等(資料添付も可)

参加をした主な国際シンポジウム等		
開催時期(年月)	国際シンポジウム等名称	招待講演/議長の有無
なし		

⑦本共同研究に関し実施(主催、共催、後援等)したシンポジウム・集会(注 6)等(資料添付も可)
(注 6) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者以外を含む参加募集によるもの

開催日	実施地 (国、県、市など)	形態 (注 7)	シンポジウム・集会等名称	目的及び概要	対象者 (注 7)	参加人数 (海外(注 8))
なし						

(注 7)

形態:シンポジウム、セミナー、公開講座、ワークショップ、その他

対象:一般、地域、学生、研究者

(注 8) 海外機関に所属するもの

⑧本拠点共同研究に係る成果が科学研究費などの外部資金の応募(予定を含む)やプロジェクトに発展した例があればご記入ください。

・プロジェクト名 ・代表者・関係者(所属) ・関係研究者 ・予定の場合は、(予定)と記載してください	・プロジェクトの主な財源 ・金額	プロジェクト期間	・プロジェクト概要 (目的・期待効果、規模、参加国等) ・これまでの本共同研究との関連性 (300 字程度)
・グリーンランド・イヌイト社会における互酬的自然観と功利主義をめぐる総合的研究 ・代表者:高橋美野梨(北海道大学)	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(A))	令和 3~5 年度(最大値)	本拠点の萌芽的異分野連携共同研究「北大西洋海域における捕獲・処理・消費・廃棄過程を通して見る自然/社会の関係性をめぐる総合的研究」(平成 31~令和 2 年度)の枠組み

	7,100,000 円(直接経費) 2,130,000 円(間接経費)		で実施した科学知と在来知との「共存」をめぐる学際研究、および同時期に開始した科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(若手研究))「北極グリーンランドにおける科学と在来知の調和と背反をめぐる政治学的実証研究」(平成 31～令和4年度)の内容を格段に発展させることを目的に応募し、採択された課題。取り組まれる具体的目的・期待効果については、本報告書(2)、あるいは本拠点の萌芽的異分野連携共同研究に新規応募中の「人間と自然の交流の位相をどのように捉えるか:キリスト教、世俗/近代、イヌイット社会」にて詳述している。
--	--	--	---

⑨研究成果が一般社会産業界などに還元(応用)された事例や新しい研究分野の開拓や教育活動に反映された事例(資料添付も可)

なし

⑩その他国際研究協力活動事例

事業名	概要	受入人数	派遣人数
なし			

⑪学会賞等受賞、アウトリーチ、取材、その他

年月日	所在・出典・新聞名等	受賞者・関係者(所属)	研究課題名・賞名・内容等
なし			

記事コピー等を添付してください。

⑫コロナ禍の影響と対策

本共同研究へのコロナ禍の影響と対策(改善・代替策、計画変更、工夫等)、助成金執行率(%)について記述してください。

影響の事象	対策の有無と内容 (計画変更・中止、改善・代替策、工夫等)

現地(外国)調査	中止
国内研究会(もしくは学会)	Zoom 開催
招聘	中止